

笹岡由梨子／咲くやこの花インタビューvol.21

笹岡由梨子(ささおか・ゆりこ)【令和元年度 美術部門[現代美術]】



アナログな人形劇にCGで実写の顔や身体をコラージュのように合成した映像作品が、時に「絵画的」とも評される現代美術家の笹岡由梨子さん。オリジナルの歌やメロディが付いた作品はシュールで奇抜。懐かしの特撮映画や幼児番組にも通じるコミカルさも魅力です。2014年、京都市立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。2017年、同大学院美術研究科博士(後期)課程メディアアート専攻満期退学。国内外のグループ展や滞在制作などで作品を発表するなど、国際的な活躍が期待されるアーティストのひとりです。長髪のプロフィール写真から一転、スキンヘッドにして「生きやすくなった」と微笑む彼女に、表現者としての原点を伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「エネルギーを費やせる絵と出会い、ようやく救われました」

本日は、贈呈式と同じヒョウ柄のロングジャケットでのご登場です。

この柄に、大阪へのリスペクトを込めました。坊主にしてからむちゃくちゃファッションが楽しくて。何着ても大丈夫、みたいな(笑)。毎日楽しいです。学生の時にも一回したんですが、その時は甲本ヒロトさんみたいにボーイッシュな感じで。今は「太陽」というビデオ・インスタレーションでの撮影のためにロングヘアをカットしました。ファッションはフレディー・マーキュリーに影響されています。ずっと好きだったんですが、移動中の飛行機で映画『ボヘミアン・ラプソディ』に感動したのがきっかけです。行き帰りで3、4回ほど観て毎回泣きました。



どのあたりに一番惹かれたのですか。

フレディー・マーキュリーはセクシャル・マイノリティの方じゃないですか。私も性別とか結構あやふやな人間なので、自分にも重なる部分がありました。

贈呈式でもおしゃれな着こなすと、晴れやかな笑顔が印象的でした。

贈呈式では各ジャンルのスターに囲まれて楽しかったです。普段、音楽と美術の組み合わせはあっても、古典芸能や小説家の方と同じ場所に立つことがないので、改めて色々な文化に携わっている方がいるんだなと。それぞれ別の場所で活動しているけど、こうして繋がっているんだなというのは、受賞者の方たちともお話しました。皆さんの公演を私も観に行きたいです。

会場は大阪市中央公会堂。市長との記念撮影は毎年、天井画のある特別室で行われます。

ヨーロッパで同じような天井画を見ましたが、その図柄が日本の神話に置き換わっていて、あれは同じ日本でも京都にはない、大阪っぽい感性だなと思いました。めっちゃ良いものを見せて頂きました。



咲くやのみならず、大学在学中の 2014 年から毎年のように賞を受賞されていますね。

それは本当にありがたいです。自分のやってきたことが表彰されるのは嬉しいですね。現代美術家で作品をお金にできる人は本当にわずか。みんな霞を食べながら生きてみたい人が多い。私はケチるのが好きなので、食費も月 8,000 円内でおさめたり。先日も鍋いっぱい肉じゃがを作って、それを 4、5 日かけて食べました。今日の服もファストファッションを改造したもの。貧乏ってある意味クリエイティブだなと思う反面、賞金を頂いてなんとかやって来れたところもあるので、咲くやから賞金が無くなったのは残念です（笑）。

そんな易しくない芸術家活動の原点とは。興味や関心は子供の頃から？

とくに美術と関係がある家庭で育ったわけでもなく、子供時代は結構変わっていたみたいです。こんなにちゃんと喋れる人でもなく、出来ることと出来ないことの差がはっきりしていた。片付けや長時間座っていることが苦手で、集中力も発揮できない。漢字テストも少し勉強すればできるのに、あえてしないとか。それでも昔から絵を書くことは好きでした。ただ通っていた四天王寺高校には美術科もなかったですし、大学進学もぼんやり「外大にでも行こうかな」と思っていたほど。そんな時、祖父が「由梨子は絵を描くのが好きだから、美大へ行ったら良いんちゃうか」と言ってくれて。そこからとんとんと話が進みました。

過去のインタビューでは、作品を作らないと「心が荒れていた」とお話されています。



エネルギーが自分の中に結構あるタイプだと思うんですが、そのエネルギーをどう発散していいのかわからなかった。それが勉強だという人もいるけど、自分はそうじゃない。常にフラストレーションが溜まっている状態が続いていて。実際、モノに当たるようなことも、していたかもしれません。でもいざ美大受験となった時、初めて真剣に集中できたのが絵を描くことでした。「こんなにも頑張れて、こんなにも集中できることがあるんや！」と発見できた。その後、大学で軌道にのってからは暴れることもなく(笑)。すべてのエネルギーを作品に費やすようになって、ようやく人の形を保てた。絵に救われて来たというか、そんな人生でした。

その当時、ご家族との関係は？

長い反抗期みたいな時期がわりと続きました。家が厳しかったのでそれに反発したりとか。それでもやっぱり末っ子だったこともあり、家族は可愛がってくれました。とくに祖父母は沢山褒めてくれました。中高生の頃はよく家に遊びに行き、食事を一緒にとりながら話をするという感じで。祖父が美大を勧めてくれなかったら、ろくな人間になってなかったと思います(笑)。大学でも3、4年かけて、ようやく映像という自分が一番エネルギーを注げるものを見つけられました。そこから作品を通して「自分がどういう人間か」を覚えてもらい、人間としてまともになれた感じです。

具体的にはどんな発見がありましたか。

みんなそれぞれ誰にでもひとつ才能があるということ。私は時々、自分がポケモンで言うところのキャラクターだろうと考えることがあって。クサクサするのは、自分の属性と自分が得意とする技を見つけられていないから。大学でも木工が得意な子がいるけど、私は全然できない。でもパソコンでの単純作業なら永遠にできるみたいな。自分は幸運にも得意なものを見つけられたし、そこからもっと効果的な能力というものが、今後40、50年かけて磨かれていくのかなと思えるぐらい、今の制作方法がフィットしている。大学の先生には、「不得意なことは諦めていい」とも教わって。得意なことを人一倍伸ばしたら、それが武器になる。

だから中途半端に平均的なことはしなくていいんだと。そこから、諦めるのは早かったですね(笑)。これ自分に向いてないと思ったらバサッと切って絶対にやらない。そうやって片寄った方向に進んだ結果、今の作風にたどり着きました。



大学進学のかきかけとなった絵は、自然と描き始めたのですか。

そうですね。今も映像を作る時は、最初にたくさんドローイングをして制作します。私は人の顔の癖を捉えるのが好きで、一度高校時代にそれで友達を泣かしたことがあるんです。よく友達に頼まれて上履きに絵を書いていて、その子にも絵を書いて欲しいと言われたので、特徴的な鼻を誇張して似顔絵を書いたら泣かれてしまった。でも、それを見た他の人たちが、ちょっとこいつは違うな、みたいなの。ここまで気を使わずに誇張して表現できるのは、凄いのかもしれないなって(笑)。美術とは全然関係のない英語の先生とかが、美大を勧めてくれました。今思えば自分の意思とは関係なく導かれた感じ。不思議な人生です。

導かれるままに従って、今の生活がとてもフィットされているようですね。

坊主にして余計生きやすくなりました。それまでは、自分の中で「フェミニン期」だったので髪を長くしていたんですけど、面倒くさい人がいっぱい寄って来るようになって。別にレズビアンってわけでもないんですけど、男の人が面倒くさい。私は性的なことが気持ち悪いと思う人間なんだと、20代後半ぐらいに気づいたんですけど。しっとりとした空気を出されると、来んなやみたいになる(笑)。でもこの髪型にしてからは、そういう人が寄って来なくなった。自分の周りにも、自分を人間として見てくれる人がすごく多くなってきて、仕事もしやすくなりました。いま「自分として生きてる！」という感じがしますね。

「作品は吐瀉物。完成後は恥ずかしさで自爆してます(笑)」

芸術は一方で生活の手段でもあると思います。まず、作品はどのようにして生み出されるのでしょうか。



基本的には展覧会のために作ります。制作費は展覧会のために準備される「アーティストフィー」を利用します。出展にあたり、あたなにはこれだけ支払いますという前金制度のようなもの。だいたい赤字なんです。映像は絵画と違って空間自体を作品化するような所があるので、売りやすいものじゃない。実際なかなか買い手がつきにくいものだと思います。反面、映像は運搬費がさほどかからない。絵画だと作品が大きくなると運搬費もめちゃくちゃかかるので。海外の国際展で映像作品が多いのも、多分経費の都合もあると思います。売れない反面、呼ばれやすいメディアではある。だから自分は、海外でわりと活動できるんじゃないかな。

大学時代は、課題のテーマに沿って制作していたのですか？

大学ではほとんどが自由制作でした。テーマも自分で見つけないといけない。日本の美術教育は「なぜ」というコンセプトを強く求める傾向が強いと思います。例えば、「和菓子」というテーマでは、単に好きが理由の人よりも、和菓子屋の娘だという人の方がテーマに説得力がある。そうやって「なぜ」を意識してテーマを考えることで、自分の中でも納得がいくし、迷いなく作品を作れるようになったかもしれません。

いま一番興味のあるテーマは。

根源的なことなんですけど、2016年に愛犬を亡くしてから「死」をテーマにずっと作品を作っています。また、祖父が亡くなった時は、みんな人は死を前にすると天使になるんだなと感じました。親戚が集まっているいろいろ動くんですが「僕がやっておくよ」とか、普段とは違う言動の親戚をみて「いまは別人格なのかな」と思ったほど。みんないい人だし、みんな天使みたいだなって。大切なひとが亡くなる時、人間は改めて優しくなるのかなと感じて、その謎について思いを巡らせているところです。

作品を見た観客からは「ちょっと不気味」「ユーモアがあって楽しい」などの声も聞かれます。観客の反応はどのようにとらえていますか。



確かに不気味だとおもいます(笑)。私は例えが悪いんですけど、作品は自分の吐瀉物だと思っていて。一切の小細工なしで食べてるものがそのままナチュラルに「出てもうた！」という感じ。意図的に怖くしようとか、何かを狙ったわけでもなく。作品ができたらめっちゃ恥ずかしい。完成して「やったー！」と思うのは10秒ぐらい。その後は「こんなものを作ってもうた。もう見ないで」と、冬眠期みたいに誰にも会いたくなくなる。恥ずかしさで自爆してます(笑)。やっぱり途中からのめり込んで、見せることを考えて作らなくなるんですよ。楽しくてあれもこれもとやってしまう。この年齢まで見せることに慣れないので、一生慣れないと思います。

2020年は年明けから台湾の現代美術アートフェア『台北當代(タイペイダンダイ)』に参加されました。毎年アジアを中心に世界中から90以上のギャラリーが出展、来場者も3万人に迫る勢いのビッグイベントです。

世界のトップ画廊が出している、多分アジアで一番大きなアートフェアだと思います。日本では絶対無理な規模で。とういのも日本には海外のような税金対策もないので、現代美術の買い手が少ない。特に東京に比べて、関西は本当に買い手が少なくて。ただ、販売を考えると日本では大きな絵は売れないから、小さい絵になったりする。でもそれって、作り手として面白いのかなとは考えます。その点、関西の美術界では純粋に作りたいものを作って、突っ走れている感じがする。歴史的にもハードコアな状態が続いていると思います。



売れるための作品づくりに疑問を感じると。

それはずっとあります。逆に作品の可能性を狭めるというか。今回のアートフェアも、むちゃくちゃ素敵な機会でしたし、普段私の作品をどこで買えばいいのか分からないという方が、実際に買って下さったりして本当に嬉しかった。と同時に、その疑問はぬぐえませんでした。自分は商いの方には全く気持ちが向かないので、今回が最後のアートフェアかなと。そもそもアートフェアに参加するには、画廊に所属しないと無理だし。行きたい画廊はあるけど、私に対等の立場になれるまで所属はしないでおうと思っているので。でも多分、販売方法は他にもあると思うんですね。

「関西と東ヨーロッパ、芸術を介して架け橋になりたい」

フェアを通して、改めて作家としての立ち位置を確認できたのでは？

例えば、インスタグラマーと言われるような人がいる。美女がお絵描きしてて、その姿を撮影している人がいる。それは誰かと思ったら、裏に大きな広告会社がついているケースもあるんです。利潤はあげてるけど、それは美術の歴史には食い込んでこない。どちらが良い悪いもないとは思いますが、自分のいる場所で、なりたい作家を目指したいなと思っています。画廊に所属していないのでフリーランス。お金には困

る時が多いけど、仕事には困らない。やりたいことをやって超楽しく生きている。余計なことを考えずに、作家活動ができてるなという感じです。

どんな理想を描いていますか。

実現しつつあるんですけど、日本と海外の両方で展覧会をしていきたいです。とくに東ヨーロッパを中心に、いま活動の場を広げています。近年の美術界は、資本主義社会への依存が強くなっていると感じています。アメリカとか西ヨーロッパとか、マーケットに直結したような美術シーンが結構あって、自分はその面白味を感じない。2020年にもロシアとポーランドに行くんですけど、東ヨーロッパはハードコアな関西のアートシーンと似ている部分がある。都心に対しての地方というか。作品の売買に依存しない、違った形のキャラクターやコンテンツを持っているので、その辺をフィーチャーできれば。共通点やエッセンスをより濃く出せるような展覧会を企画して、関西や東ヨーロッパで発表したいですね。国内外の“地方”をガンガン攻めていく。関西と東ヨーロッパの架け橋になりたいです。



東ヨーロッパとの出会いは？

滞在制作でスイスに行ったことがあって、そこから「しりとりで五大大陸を制覇したい！」と、わりと安直な考えで、スイスから北マケドニア共和国の首都スコピエに入りました。そこが東ヨーロッパにハマるきっかけです。マザー・テレサについてリサーチしに行ったのですが、初日に100人単位のロマに会ったので、熱を出しました。彼らは貧しいイメージがありましたが、リッチ・ジプシーとって、普通に私よりも生活水準が高い。車も持ってるけどロマ、みたいな。インターネットでは知り得ない情報を知ることができました。マザ

一・テレサについても、年代によって全然抱いている印象が違う。それまでの聖人のイメージを覆すような話も聞けて、現地へ行かないと本当のことは分からないものだと思いました。あと、アジアからの入口がポーランドだったり、ロシアも日本と近いですし、ミステリアスな東ヨーロッパも意外と韓国や中国と同じ、日本の隣人なんだなと気づかされて。面白い文化も多く興味を持ち始めて、自然と作品にも東ヨーロッパを意識したものが出てくるようになりました。

また、最近では動画サイトを使った“広報活動”も思案中とか。

まだまだ日本でも知名度がないですし、しかもアートフェアに参加するまで、自分がフリーランスという自覚がなかった。画廊に所属しないと宣伝してもらえない機会もないので。だったら自分でできることをやってみよう。動画サイトだと無料で発信できますし、映像の機材なら揃っていたので。インスタグラムなどのメディアはすでに開拓されているけど、ユーチューブに作品をあげている方はまだあんまりいないのかなと思って。作品をストックしている段階ですが、皆さんチャンネル登録よろしくお願いします(笑)。



来る 5G 時代の追い風にも乗って。

ももとは博士課程に進学するぐらいアカデミックな人間で、2018 年までツイッターすらやったことがありませんでした。当時は「大学の先生になれなかったら人生終わる」と思うほど、頭ガチガチの人間で。でもいざ卒業して外に出ると、色々な形で作家活動している人がいて、しかも大学の常勤になったら自分の制作や展覧会のために「一ヶ月学校を休みます」なんてことができなくなるんだと気づいて。それを諦めるぐらいなら、大学とは違う方向で自分で生きる術をちゃんと見つけようと思いました。まだ思ってる段階で、成

功はできてないですけど。日本はあまり作品が売れないとか、国の制度や置かれた環境に不満を持つ作家も多いけど、私はそんな状況だからこそ、何か面白い生き方ができるんじゃないかなと最近すごく思っています。ピンチはチャンス？ まさにそう。いまサバイブして「生きてる！」って感じです。



★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

通天閣のある新世界がめちゃくちゃ好きで、よく行きます。心斎橋とかもそうなんですが、商店街にある極彩色の看板が、大阪にしかない風景だなんてすごい思う。同じアジアでも中国や韓国ともまた違う、独特の色彩感覚。大阪はご飯も安くて美味しいですし、みんなが肩の力を抜いて人間らしくあるというか。日本人でロボットみたいなイメージもある中で、自分も「人間になりたいな」と思ったときは、大阪の町を歩きます。新世界をぶらぶらして、スーパー玉出とかを覗いて。そうやって人混みの中に入っていくと、自分のおかげで自然と鎧が取れる感じがして好きですね。

★展覧会情報や過去作品など詳しくはSNSをチェック！



【公式サイト】<https://sasaokayurikoworks.wixsite.com/sasaokayuriko>

【Instagram】[sasaokayuriko.works](https://www.instagram.com/sasaokayuriko.works)

【YouTube】現代美術家/笹岡由梨子

<https://www.youtube.com/channel/UC1H3GLoXNf0NaFycr9wDoyg?app=desktop>

【Twitter】[sasaoka_works](https://twitter.com/sasaoka_works)